

# 琉球大学学術リポジトリ

## 中島敦「山月記」を読む

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-07-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小澤, 保博, Ozawa, Yasuhiro メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/1169">http://hdl.handle.net/20.500.12000/1169</a>

# 中島敦「山月記」を読む

小澤保博\*

A new Reading on A, Nakazima's SANGETSUKI

Yasuhiro OZAWA

## 1

中島敦の作品の中には、しばしば自己の存在を根源的に問う実存的懐疑が作中人物を通して作者によって記述されている。最初に作者によって漏らされたこうした生の吐息を拾いながら「山月記」において結実した変身譚の意味について以下考察を進めたい。

「俺というものは、俺が考えている程俺ではない。」「そういう自由人は、自己の中で人類発展の歴史をもう一度繰り返して見なければならぬ。」（「かめれおん日記」）

「かめれおん日記」とほぼ同時期に執筆された「狼疾記」においても中島敦独自の自己存在を問う実存的不安が作中人物の口を借りてさり気なく記述されている。「俺達は、俺達の意志でない或る何か訳の分からぬもののために生まれてくる。俺達は其の同じ不可知なもののために死んで行く。」（「狼疾記」）

後年の作品「光と風と夢」の中では、作中人物は行為と思索の中で揺れ動きながら思索においては、あまりにも中島敦的な其れを示している。「自分は自分が思っている程、自分でないこと」「頭は間違ふことがあっても、血は間違わないものであること。仮令一見して間違つたように見えても、結局は、それが真の自己にとって最も忠実且つ賢明なコースをとらせているのであること。」「我々の中にある我々の知らないものは、我々以上に賢いのだということ」

こうした自己の存在そのものに対する果てしない懐疑を抱いた主人公は、あまりにも中島敦的思考に支えられて南洋サモア島のアピア街道を歩きながら、生れ故郷のエジンバラの街角を彷徨い歩く幻想に捕らわれるのである。「ここはアピアだぞ。エジンバラではないぞ」と言い聞かせな

がら、意識は速のいて肉体は故郷の街を彷徨う。

肉体と意識が乖離した主人公は、意識の中で数年前の自己の行為の追体験を行うのである。作中の主人公に仮託された自己の存在に対する根源的な懐疑は、作品「山月記」において一つのピークを迎え変身譚として象徴的に表現されることになる。

## 2

「山月記」の李徴は、作品冒頭から高貴な精神を持った若い有能な鬼才として登場する。彼の人生を狂わせる原因は、戸外から彼を呼ぶ声であるが、彼を人間界から引き離すこの運命の声は何か。「戸外で誰かが我が名を呼んでいる。声に応じて外に出てみると、声は闇の中からしきりに自分を招く。覚えず、自分は声を追うて走り出した。」

高いプライドを傷付けられた李徴の高貴な精神は、夢遊病者のように彷徨するが、詩人の狂熱的情熱の行き着く果ては、変容としては、その精神の高貴に相応しく虎となって読者の前に再登場するのである。虎に変容した李徴の外観は、図らずも矜持を失うことのない詩人としての彼の精神の高さを我々に示している。この李徴は、古い友人の前で自分がいかに世間の無理解によって傷付き敗北していったかを綿々として告白するのである。

「なぜこんな運命になったか判らぬと、さっきは言ったが、しかし考えようによれば、思い当たるものが全然ないでもない。」以下の李徴の告白である。ここには問題になっている「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」という矛盾に満ちた言動がある。

「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」と言う言葉によって象徴的に表現されている李徴の分裂した

\*国語教育教室

精神は、先に引用した問題の告白文全体の中で十二分に表現されている。李徴は、告白文において繰り返して自分が詩人に成り損なった事を屈折した文脈の中で繰り返している。しかし告白文其れ自体は、先に引用した「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」にみられるように、それ自体矛盾表現によってなされているために単純な敗北意識に終わっていないのである。

何故このような結果になったのか。其れは、李徴が友人の前で自己の精神の敗北を告白しながら、その一方においてはその敗北を彼自身彼の精神の内部にあって決して認めていないからに他ならない。虎に変身した事自体が高貴なる精神の敗北を意味しているばかりでなくて、敗北の告白自体が古い気を許した友人に対する甘えでもある。

全ての人間が人生において何らかの敗北を経験する限り、李徴のこうした敗北の告白は、我々の心を打つなにものかを有している。人生に敗退した人間が下等な異類に変身し、全面敗北の泣くごとを延々と述べる事に我々読者は耐えられない。我々平凡な読者は、そうした写実的リアリズムに耐えられないのである。

一人の男の敗北の物語を、音読すれば心の奥深く響く美しい漢文訓読体によって表現したところに作品「山月記」の名作たる所以がある。敗北感なくして人生を生きられない多くの読者にとって「山月記」の音読は一つの人生の救いでもある。

「李徴は博学才穎、天宝の末年、若くして名を虎傍に連ね」という冒頭の文章に若い中島敦の矜持をみる事は可能であろう。さらに「節を屈して」「一地方官吏の職を奉ずる」事になった李徴の運命に大学院を中退して学問の道を断念した中島自身の経歴を重ねる事も可能であろう。一般的な従来の評価と異なり、李徴は妻子への愛の為に其れに伴う、執念の分散がもたらす才能の発露の不足を危惧するあまり「節を屈した」のである。そこには早く学生時代に結婚し、長男を儲けていた身動きならない中島自身の人生の反映があるだろう。(後年南洋通信の中で学問への道を断念した事を中島自身が妻子への書簡の中で後悔している)

李徴の発狂の実体は客観的には次のようなものであった。「或夜半、急に顔色を変えて寢床から

起きあがると、何か訳の分からぬことを叫びつつそのまま下にとびおりて、闇の中へ駆け出した。彼は二度と戻って来なかった。」この李徴の発狂は、李徴自身の告白によれば端的に次のようなものであった。「戸外で誰かが我が名を呼んでいる。声に応じて外へ出て見ると、声は闇の中からしきりに自分を招く。気づず、自分は声を追うて走り出した。」と言う事になる。李徴を人間界から引き離し異類の世界に連れ出す「声」とは、一体何か。勿論言うまでもなく、李徴は自分自身の精神の内部の声によって導かれ異類に変身するのである。したがって問題になるのは、変調を来した李徴自身の精神そのものと言う事になる。異類に変身した李徴の精神を解明し、分析する精神分析上手掛かりとなる李徴の言動は、残念ながら「山月記」内部には明白な形では見出だす事は出来ないのである。従ってその分析は、あくまで精神分析上一般的な学問的記述の内部に止まるであろう。

変身と言う「超自然の怪異を、実に率直に受け入れて、少しも怪しもうとしなかった。」のは、作中人物だけではなく読者も又作者中島敦自身もそうであったろう。作品の中で李徴の告白そのものが地の文に自然に流れ込んでいる記述上の手法の効果が大きい。中島敦がこうした文学上の描写手法を手に入れたのは、早くからカフカの作品に親しんだ事や異類を描いた谷崎、鏡花、あるいは秋成の作品を読んでいた事が無意識に作用したように思う。

自らの心の内部の声に誘われて戸外に飛び出して走り出した李徴は、気が付いたら虎に変身していた。「自分は初め眼を信じなかった。次に、これは夢に違いないと考えた。夢の中で、これは夢だぞと知っているような夢を、自分はそれまでに見たことがあったから。」これが李徴が虎になるまでのプロセスであり、肉体変貌の驚きを精神が驚愕をもって知る瞬間である。肉体と精神が乖離して心が驚きをもって後から其れを認識する。「光と風と夢」「牛人」等の主人公と同じく李徴は、あまりにも中島敦の精神の強い反映を我々に見せている。「自分は茫然とした。そうして懼れた。」と。中島敦自身が繰り返して述べているように、自分は慣れる事が出来ない。社会と人間が作った秩序の一つ一つに慣れる事が出来ない。そこには

彼の幼児からの母親の欠如が影響しているように思える。「全く何事も我々には判らぬ。理由も判らずに押しつけられたものを大人しく受け取って、理由も分からずに生きていくのが、我々生きもののさだめだ。」と言う李徴の運命観、人生観は即そのまま中島敦自身の幼児からの宿命観を反映している。

3

虎に変身して原野を疾駆する李徴の精神に時として「人間の心」が蘇って彼を苦しめる。しかし彼の言う「自分の中の人間」は、眼の前を横切る一匹の兎によって姿を消す。生存の為に理性は後退し、「人間の心」は次第に李徴の精神から失われていく。意識は其れを拒絶しながら肉体は、生存の為に次第に獣性の中に埋没していくのである。そして李徴自身はその事をこの上なく「恐ろしいことだ」と認識している。

こうした図式は、やがて「李陵」において雄大に展開される事になる。身は辺境の匈奴の地にありながら精神は、故国漢の地から離れる事のない主人公はやがて次第に生活の為、生存の為に辺境の地に埋没していく事になる。意識は故国漢を求めながら、肉体は全面的に匈奴の生活に屈服していくのである。意識が匈奴の生活を見なくても、やがて肉体は辺境の地に埋もれていく。「古い宮殿の礎が次第に土砂に埋没するように」「己の中の人間の心がすっかり消えてしまえば、恐らくその方が、己はしあわせになれるだろう。なのに、己の中の人間は、その事を、この上なく恐ろしく感じているのだ。」

この李徴の告白は、やがて中島の最後の作品「李陵」において主人公の肉体をもって胸を焼く苦しみとなって全編に展開される事になるのである。「山月記」李徴の肉体と精神を引き裂く乖離の苦痛の源泉は、恐らく中島敦自身の経歴から類推する事は可能であろう。父の転勤により国内の小学校を移り変わり、やがて朝鮮において少年時代を過ごした事、それらは母のない彼にとって意識の分裂を来す程の苦痛であったはずだ。

李徴はかつて「詩数百編」を作って、その内「数十」を記誦していて、実際に書き取ったのは「長短凡そ三十篇」である。この作品数は、中島

敦が死後残した作品数に一致している。「このままでは、第一流の作品となるのには、何処か（非常に微妙な点に於いて）欠けるところがあるのではないか」という批評は、作者中島敦自身の自分の文学そのものに対する根源的な懐疑である。

作品中で言えば「産を破り心を狂わせてまで自分が生涯それに執着した」李徴の詩「三十篇」を「格調高雅、意趣卓逸」と評価を下しながら「欠けるところがある」と認識出来る友人は、李徴以上の詩才を持った人間として設定されている事になる。構想上の矛盾であるが、これは中島敦自身の自作に対する過酷な評価が作品中に無意識に吐露されたものとして理解したい。李徴の詩「三十篇」の実体は、その片鱗も我々に示されていないのであるから、それが果たして「格調高雅、意趣卓逸」であるか、一流の作品になるために「何処か欠けるところがあるのではないか」作品外の蚊帳の外にいる我々に分かりようがないのである。

虎に変身し山野を疾駆する李徴の意識の中を時として「人間の心」が蘇って李徴を苦しめる。「自分の中の人間」は、生存の為に、食欲の為に瞬時に意識が遠のくのである。野生の虎と人間の意識の中で錯綜する李徴の精神から次第に「人間の心」が遠のいていく。この事を李徴は、「人間の心」で「恐ろしいことだ」と認識している。

4

「己は俗物の間に伍することも潔しとしなかった。共に、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心との所為である。己の珠に非らざることを具れるが故に、敢て刻苦して磨こうとせせず」

有名な李徴の告白の箇所である。この告白を表面上率直に受け止めれば、李徴は社交性の欠如によって詩人になり損なった事になる。果たしてそうであろうか。一流の詩人に成る事に社交性など必要ない。一流の詩人になり損なった李徴の脆弁であり、社交性の欠如によって世間から孤立して結果的に「僅かばかりの才能を空費し」「己よりも遥かに乏しい才能」の人間に遅れをとったという言い訳である。しかしこの李徴の告白は、図らずも李徴自身意図しなかった彼の人生の真実を吐露している。李徴によれば彼は、詩人になるための努力を何一つしなかったと告白している。この

告白は、十二分に信頼出来るはずである。何故なら彼自身繰り返して、自分は詩人になる為の努力を怠った、何一つ努力らしい努力をしなかったと力説しているからである。芸術の道が、地道な努力を怠るものに閉ざされているのは自明の理である。

「俗物の間に伍することも潔しとしなかった。」という李徴の発言は、中島敦自身の学生時代の体験が色濃く反映している。十代から作家を志しながら当時盛んであった同人雑誌に関係する事なく、第一高等学校の仲間達との同人雑誌「しんぼしおん」には作品執筆の形跡がない。文芸部委員として参加していた「校友会雑誌」に身辺雑記風の小品を掲載しているのに過ぎない。「己は詩によって名を成そうと思いながら、進んで師についたり、求めて詩友と交わって切磋琢磨に努めたりすることをしなかった。」と。

「山月記」執筆時には、こうした学生時代の仲間の名前が雑誌に載る機会もあって、私立の女子高等学校教諭であった嘗ての学校秀才は、心理的に追い詰められ焦っていたのである。それが「己の珠に非ざることを懼れるが故に、敢えて刻苦して磨こうともせず、又、己の珠なるべきを半ば信ずるが故に、碌々として瓦に伍することも出来なかった。」と言う苦い自己告白に、自己反省につながるのである。

何故積極的に文学活動に参加出来なかったか。「我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心の所為である。」ここにも中島敦の経歴の反映がある。京城中学開校以来の秀才として四年終了で第一高等学校に入学し周囲の人達に大いに期待を抱かせながら、女学校の教員として日々を生きねばならない彼の精神内部の葛藤がある。学校秀才に過度の期待を抱く植民地に生きる日本人の空気も彼にとっては、精神的に重荷であったかも知れない。

精神内部の葛藤によって彼は、立ちすくんでしまつて前に進む事も後ろに引く事も出来なくなったのである。学問の家系に生れ育ち自らの才能への自負は、自らを「珠」と認識し同人雑誌に参加する有形無形の若者達の野心に対しては「瓦」という評価を下していた。こうした彼にとって学生時代の同人雑誌の仲間達の名前を当時の総合雑誌に見る事は、相当に苦痛を感じさせるものであつ

たようだ。「人間は誰でも猛獣使いであり、その猛獣に当たるのが、各人の性情だという。己の場合、この尊大な羞恥心が猛獣だった。」という告白に当時の中島敦のおかれた敗北感の痛みを感じる。この敗北感の痛切な痛みの中から少年時代の秀才中島敦は、再び文学によって再生する事になるのである。「山月記」の作品としての美しさは、高貴な精神の敗北の美しさにある。社会の下層の人間が、努力によって這い上がって社会の上層、権力に近付いていくという話では文学的な素材に成りにくい側面がある。

## 5

作中で李徴が綿々と語る敗北の告白は、一言で言えば少年時代の学校秀才が、過度の才能への自負と気負いと周囲の賞賛の中で何一つ努力せず、必然としての敗北感を味わうという社会によくある話を格調高い、疑似漢文によって綴った話である。「虎と成り果てた今、己は漸くそれに気が付いた」という李徴の告白は、中島敦自身の第一高等学校、東京帝国大学卒業の経歴が、そのまま日本社会を縦横無尽に横断する事を許すほどに有効でない事を知った後の彼の自覚の痛みの中から出てきた言葉である。

そしてこの敗北の痛みの中から彼は、文学の世界で再出発するのである。文学を志した彼の友人の多くが「刻苦を厭う怠惰」を自覚する事なく、「虎に成り果てた」ことすら自覚する事なく、走り続けて後に何も残さなかった事を考えれば、「己の場合、この尊大な羞恥心が猛獣だった」という李徴の自己批判は称賛されるべきである。虎となった李徴に残されたのは、親友との美しい別れの場である。高い矜持を持ちながら敗退する者に相応しい悲劇的な別離。こうした場面は、相当に陳腐であり、永井荷風「溷東綺譚」は、この種の古典的な別離をパロディ化して成功を収めたが、荷風の賛美者であった中島敦は、正攻法で悲劇的な別離を作品化して成功した。

「己の毛皮の濡れたのは、夜露のためばかりではない。」と言った新派の芝居のような気障な台詞も漢語調の格調高い日本語のリズムと、光と風を用いた印象的な自然描写によって別離の美しい余韻を残しているのである。「時に、残月、光冷

やかに、白露は地に滋く、樹間を渡る冷風は既に曉の近きを告げていた。」

声を出して読んだ時、読者を恍惚とさせる疑似漢文の音の美しさに中島敦の文学的手法の極致を見るのは私だけではないはずである。「漸く四辺の暗さが薄らいで来た。木の間を伝わって、何処からか、暁角が哀しげに響き始めた。」というのも光と風と音の交錯による暁闇、曙光の瞬間的な時の流れを印象深く把握した中島敦の文体の凄さと言える箇所である。

「君が南から帰ったら、己は既に死んだと彼等に告げて貰えないだろうか」と言うのも友人との美しい永遠の別離の為の設定に必要な小道具であり、内容的に意味のある発言とは思えない。以下は、全て最後の美しいフィナーレを整える為の技巧的文節である。

「虎は、既に白く光を失った月を仰いで、二声三声咆哮したかと思うと、又、元の叢に躍り入って、再びその姿を見なかった。」

象徴的、印象的な永遠別離の美しさを陳腐な別れにしないで真に悲劇的な幕切れにして閉じた中島敦の文学的手法は賞賛に値する。友人との別離に柳の枝を折ってその無事を祈った唐詩の慣習を熟知していた彼の無意識の作為か、あるいは乃木將軍の専属報道官であった米国人の詩人スタンレー＝ウォシュバンを満州の原野に沈み行く夕日の中で柳の枝ならぬ日本刀を抜いて見送った日本軍人の面影があったか。（「乃木將軍と日本人」スタンレー＝ウォシュバン著、講談社学術文庫）

「補注1」（「山月記」の中の七言律詩について）

中島敦が「山月記」の本文中に白文のまま引用した七言律詩は、国訳漢文大成「晋唐小説」（文学部第十二巻）の「人虎傳」（唐李景撰）として掲載されている本文中に収録されているもので、国訳漢文大成掲載の書き下し文は次のようなものである。

「偶々狂疾に因って殊類と成り、災患相仍りて逃れべからず。今日爪牙誰か敢て敵せん。当時声跡共に相高し。我れ異物となる蓬茅の下、君己に召に乗り氣勢豪なり。此の夕べ溪山名月に対し、長簫を成さずして但ほゆるを成す」（旧漢字を新漢字に改めた）（ふとした事で私は狂気になり、獣の身となった。災難が重なって、最早その運命から逃れる事は出来ない。今は虎としてその爪や牙

のまえに誰も適う者はないが、あの頃はあなたと共に秀才の誉れが高かった。しかし今は、私は獣として草むらの中におり、あなたは立派な身分になって乗り物に乗り、威勢がよい。今夜、この山にいて名月に対して。出来るなら声高らかに詩を吟じたいが、其れはただ空しく獣の叫びになってしまうだろう。「山月記・李陵」集英社文庫、かなを適宜漢字に改めた）

この七言律詩は、韻連（第三句、第四句）頸連（第五句、第六句）は、それぞれ対句が用いられている。

「当時声跡共相高」の解釈について以下の三通りの解釈がある。

- (1) 「当時」を「往時」と理解して「共」を「君と共に」と理解する高田瑞穂説。（集英社文庫は、この高田瑞穂説を踏襲している。）
- (2) 「当時」を「現在」として「現在私は、人食い虎として世評が高く、またその実跡も世間に知られている」という鈴木博説。（「山月記」僻案）
- (3) 「山月記」に見える李徴の七言律詩であるが、その前半四句を示す。「偶因狂疾成殊類／災患相仍不可逃／今日爪牙誰敢敵／当時声跡共相高」「李陵・弟子・山月記」（旺文社文庫）は、この第二句を、「災難が内からも外からも重なってこの不幸な運命からどのようにしても逃れることができない。」などと訳しているが、「相」は「内からも外からも」というような意ではなく、動作に対象があることを表している。したがってここは、「このような災難が私の身にふりかかって」と訳すべきであろう。また、第四句を「昔を思えば君もこの僕も、ともに秀才の名を高からしめた。」と訳しているが、第三・四句は対句であり、ともに李徴自身の「今日」と「当時」とを対比してうたっていると考えるのが自然である。したがって「相高し」の「相」は「君もこの僕も、ともに」という意ではなく、「世の中のだれを相手としても」という意味を表す。「共に」は、「声」と「跡」ということである。この句を訳せば、「あのころは世間の評判も、実際のしごと、世の中のだれを相手としても高く秀でていた。」ということになる。（以上、山月記と「人虎伝」、東京工業高等専門学校教授吉原英夫の解説を引用する）

(1)(2)(3)の三通りの解説では、「相」を助字的用法として解釈した(3)の吉原英夫説が妥当だと思う。というのは以下のような事情があるからである。森嶋外「還東日乗」によれば、帰国途中の森嶋外は、祖国を追われて

「逐客」となった尾崎行雄にロンドンで会った。(明治二十一年七月十日)、数日後嶋外は、四篇の漢詩を尾崎行雄のために作成した。その最後の漢詩の詩句は次のようなものである。「莫触何逢蝮蛇怒／待機箝口是良謀／翻思海嶋孤亭夜／逐客相遭話紀憂」この漢詩の解釈を三好行雄は「〈舞姫〉の背景」(尚学図書「国語展望」29、昭和46年10月15日)において、祖国を追われて逐客となった尾崎行雄の心情に重ねて森嶋外自身も自らを逐客と見なした瞬間があったという自説を長期に亘って展開した。現在では良く知られているようにこの漢詩の一句「逐客相遭話紀憂」は、祖国を追われて逐客となった尾崎行雄の話は憂鬱なものであったという理解で定説化しているからである。

#### 「補注2」(「山月記」と「人虎伝」)

「李陵・弟子・名人伝」(「角川文庫」中島敦、昭和45年、改版四判)には、「山月記」の参考資料として「人虎伝」(李景亮著)が都留春雄編として載せられている。出典は、「旧小説」(呉尊祺編)として但し書きがついているが、「人虎伝」掲載の判本について詳しい事は門外漢のため分かりませんが、多分中島敦が参考書として使用した国訳漢文大成「晋唐小説」と同文だと思えます。

古典作品を近代人の知性で再構成して新しい生命を与え、読者に対して異国趣味を喚起させるという方法は、谷崎潤一郎「麒麟」芥川龍之介「羅生門」等先駆的作品があります。「山月記」は「人虎伝」の筋を逸脱してはいない。臆西の李徴という進士に登第した秀才が、故山に起伏し汝水のほとりで発狂し虎になって行方不明となった後に、商於の地において青年時代の親友で監察御史となって皇帝の使者となった友に会って自らの人生の不幸を告白し、残された家族の事を託し遺言とも言える自作の詩数編を残したという話しである。

因果応報の因縁話たる「人虎伝」の結末部、後日談が中島敦によって切り捨てられている。「後回るに南中自りし、乃わち他の道を取りて、復た此に由らず。使いを遣し番及び贈贈の礼を持ち、徴が子に訃せしむ。月余、徴が子、虎略自り京に入り、參に詣つて先人の柩を求む。參、巴むを得ず具に其の事を疏ぶ。遂くて己が俸を以て均く徴の妻子に給し、饑凍を免れしむ。參、後官は兵部侍郎に至れり。」

さらには、李徴の僕がその財産を持ち逃げしたこと。「是に於いて僕者、其の乗馬を驅り、其の囊囊を挈えて

速く遁れ去る。」あるいは袁參の発言で「我天使の使なり。従騎極めて多し。山沢の獣、能く害を為さん邪」と言ったあまりにも中国的な慣習、発言は無意識に削除している。

「人虎伝」の作者は怪異を語りながらその語り口は、即物的で虎への変身についていささかも疑問を抱いた形跡はない。唯一それらしき箇所は「君、今既に異類と為るに何んぞ尚お人言を能くする邪」と言った素朴な疑問を抱く箇所だけである。近代人たる中島敦は、「袁參は恐怖を忘れ、馬から下りて叢に近づく、懐かしげに久闊を叙した。」「後で考えれば不思議だったが、そのとき、袁參は、この超自然の怪異を、実に素直に受容れて、少しも怪しもうとしなかった。」と言ったふうに怪異の箇所では合理的な説明を繰り返している。彼自身が超自然の怪異など全く信じていなかった証拠である。

「山月記」においては重要な李徴と袁參との関係も「參、昔徴と共に進士の第に登り、分み極めて深し」だけ記述され事実関係だけを述べている。官を退く理由となった複雑な李徴の性格は「人虎伝」にはなく「跡を卑僚として屈すること能わず」のみ記されている。そして中島敦が切り捨てた「人虎伝」の最も重要な箇所は、変身の原因となった次のような外的な要因である。「南陽郊外に於いて、賞つて一婦人と私す。其の家竊かに之れを知り、常に我を害する心有り。婦人、是れ由り再び合うことを得ず。吾れ因りて風に乗じて火を縦ち、一家数人、尽く之れを焚き殺して去る。此れ恨いと為す爾」。「山月記」の李徴は、近代人としての自己の精神の分裂のために虎と化した、精神の破綻が外見を変形させたのである。「人虎伝」の物語が、荒々しく古代人の息吹を伝えているのに反して「山月記」は、「かめれおん日記」「狼疾記」に描かれた中島敦の近代的な精神の病を極限まで記述してみせた。「山月記」の李徴の告白文の中に作者の精神の苦痛は遺憾なく発揮されている。従って以下のような野生のリアリズムは、中島敦の当然探るところとはならず切り捨てられて「山月記」は、あくまで近代知識人の屈折した精神の病の風貌を我々読者の前に提供しているのである。

「一日、婦人の山下従り過ぐる有り。時正に餓迫る。徘徊すること数四。自ずから禁ずること能はず、遂くて取りて食ろう。殊に甘美なるを覚ゆ。今其頭飾り、猶お巖石の下に在り。」

「補注3」（闇から呼ぶ「声」）

「忽ち疾に墮りて発狂し、夜戸外に吾が名を呼ぶ者有るを聞く。遂くて声に応じて出で、山谷の間を走り、覺えず左右の手を以て地を攫んで歩す。」（「人虎伝」）この箇所は、「戸外で誰かがわが名を呼んでいる。声に応じて外へ出て見ると、声は闇の中からしきりに自分を招く。覺えず、自分は声を追うて走り出した。」（「山月記」）というように率直に書き直されているが、李徴を闇の中から呼び寄せる声とは一体何か、李徴を人間界から引き離し、異類の世界に導く運命の声について私見を述べたい。「人虎伝」が李景亮によって書かれた中国唐時代から中島敦が「山月記」にそれを再構成するまで千年の時間が流れているが、両作品のこの箇所での基本的構図は変わらない。

李後は、闇の中から呼び掛ける声に応じて外に飛び出すのである。両作品共に李徴の精神の闇の部分について何一つ記述していないが、断片的に描写された生活の側面から、あるいは戸外に飛び出して虎に変身するまでの最初の決定的な行為までの作品内部の記述によって彼が何等かの精神の疾病により行為に走った事が伺える。以下は、「天才の心理学」（クレッチュマー著「岩波文庫」

内村祐之訳）における分裂気質の学術的説明を恣意的に要約したものである。

分裂気質の人間は、自分の人格が外的なものに脅かされる不安定感がある。この不安要因は、時として世界没落感として自覚され、汎神論的境地に達する。こうした精神構造はしばしば神に結び付き、万有の自然との一体感により新興宗教を生み、あるいは民族を導く予言者として再生する。

分裂病の人間は、自己の精神は自己のものであって自己のものではなくて、大きな外部の何者かの示唆によって教唆されているという予感を持ち、最終的には自己の精神は喪失し、肉体と精神は無意識に乖離し、分裂し外部の巨大な何者かによって支配され、操作されると自覚する。典型的な分裂病者は、自らの頭脳に訪れる妄想を天来の神の声として受取り、人格崩壊の寸前で天才的な予見能力を発揮する。

李徴は外部の無理解によって常に精神が、脅かされていた。高いプライドと妥協を許さぬ彼の高貴な精神は、遂に外部の無理解に抗しきれず崩壊し彼の肉体を異界へと導くのである。